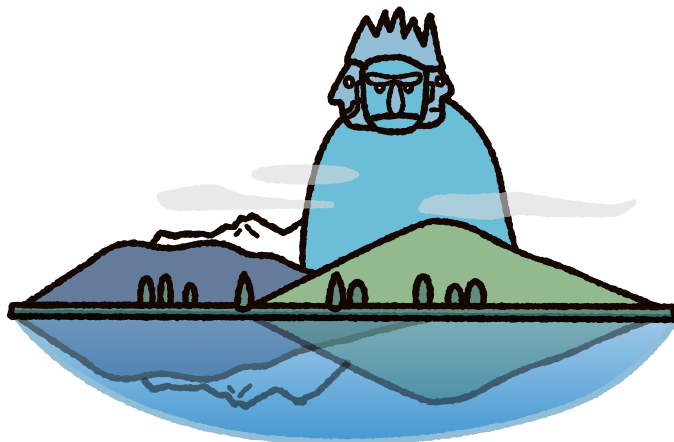


八面大王を夢想する

小松 和彦



新型コロナが蔓延しているため、やむなく自粛しているが、それまでは、年に数度は信州に足を運んでいた。多くは講演や資料調査のためであったが、その折りを利用して、めぼしいところを探しては、のんびり巡り歩くのが楽しみとなっていた。

もともと、信州大学勤務時代の経験もあって、巡る場所は、松本平から安曇野辺りの寺社や旧跡で、その休憩地として、蕎麦屋や農園も念頭にあった。

そんな中でも、妖怪好きの私の想像力を刺激したのは、大規模なわさび栽培で有名な「大王わさび農園」を訪問した時であった。もちろん、初めて訪れるまで農園名に冠せられた「大王」が、この地方ではよく知られた「八面大王」の伝説に由来するものとは、まったく知らなかった。

農園の説明によると、近くの有明山の麓を拠点とする「魏石鬼八面大王」という凶賊の首領が、坂上田村麻呂によって征伐され、その胴体がこの辺りに埋められたとの伝説にちなんで、「大王わさび農園」としたのだという。

「八面」の「大王」という珍しい名にひかれて、さっそく図書館に赴いて調べてみたのだが、八人の盗賊首領説、鬼説、中央政権に叛旗を翻した安曇族説など諸説紛々、その中でも盗賊説が有力なようで、私が思い描くイメージの大王には行

き当たらなかった。

というのも、私がこうした諸説に触れながらも満足できなかったのには、理由があった。伝説では、大王の胴体が大王農場の辺りに埋められたのに対して、その首は、なんと、そこから遠く離れた松本の筑摩神社に埋められたとされ、しかも、その説明として、大王の復活を恐れ、一箇所ではなく、バラバラにして埋めたためだ、というのであった。

しかし、私が「大王」という名前から想起したのは、これとは違って、壮かつロマンチックな「大人」(だいにらぼつち)の伝説であった。全国各地に「大人」伝説はある。その最たるものは、琵琶湖は「大人」が富士山を作るための土を得るために掘った跡だというもので、八面大王もこうした「大人」の子孫・残影であって、倒れたときの頭が筑摩神社の辺りに、胴が大王農園辺りに位置するほどの巨人だったのでなかろうか。

安曇野の大地そのものを象徴するかのような、雲をつくような途方もなく巨大で、まさしく八面六臂の活躍をする、八つの頭をもった「大人」八面大王。

大方の支持を得るかは別として、こんなことを夢想しながらの安曇野巡りは、楽しい。

(こまつかずひこ)

国際日本文化研究センター名誉教授